

# 会員企業探訪

## 「旅する花屋」は 未完了の心を抱いて 自分たちの 理想をめざす

Lamparfe 〈ランパルフェ〉 代表 吉田 大祐



白壁に浅緑色の扉、  
控えめながら可愛い看板が目印



お店に入るとまず目をひくのは、花というより  
「花に囲まれた伸びやかな暮らし」を思わせる空間



移動販売車にたくさんの花たちを積み込んで  
山陰を中心にイベントやマルシェなどへ出かける



プリザードフラワーをはじめとした小物たちは  
ひとつひとつ丁寧に、手作りしたもの

### 経営理念

シャビーシックな色合いの花を  
取り扱っています。  
松江・出雲・米子方面への  
移動販売も行います。

バス通りから一步入った大正町の閑静な住宅地に店舗を構える「ランパルフェ」。代表の吉田大祐さんは大阪の出身。大学卒業後、一年間の会社勤めを経て花屋の世界へ飛び込んだ。人によるこんでもらえる仕事があったはずなのに会社での仕事内容はかけ離れた。人によるこぼれるものって何だろうと自問するうち、人の思いや気持ちの大切さに気付いた。その気持ちをダイレクトに伝えてくれるのは花だと思い、一から勉強という覚悟で転身に至ったという。

「花の生命には限りがあって、長くはもちません。枯れてしまいます。でも、もらった時の思いはずっと記憶に残る。そんな心に残るような花を届けたい」

最初に勤めた大阪の花屋はブライダル関係の仕事が主で学ぶことも多かった。しかしまだ駆け出しの身、言われたものを作るだけの日々が続いた。27歳になりもっとレベルアップがしたいと東京の花屋へ就職。店長職も任せられるようにはなったが、その店はウェブでの注文が大半で来店客が少なく、ブランド店やブティックなどの装花を手掛けても何かもの足りない気が残った。これでは人の気持ち、人のよろこびに寄り添うという思いをとて果たせない。転職だと思った。

「もっと人と接することのできる身近な店がいい。ふと立ち寄り気軽に」  
店では毎月テーマを変えたワークショップを開催している。敷居が高そうというイメージをなくし、気軽に入門してもらえようという狙い。ワークショップではフラワーレッスンと称して季節に合わせた花束やリースづくり、寄せ植えなどを行い、併せてカフェタイムも設け、参加者との交流も図る。30代、40代の女性が多いが、内容によって10代など若い参加者もある。松江市内や近郊の他、奥出雲町や琴浦町、鎌倉市からも参加がある。SNSやホームページを見てこんな雰囲気のものなら作ってみたいと来店するのだという。ランパルフェの提供する花々、創作される小物のセンス、その世界観に共鳴する人ならば、きっと距離の大きさは関係ないのだろう。実際、母の日の花ギフトの発送先が北海道というケースもあった。商工会議所の持続化補助金でつくったホームページの発信力のおかげで、全国から問い合わせ、注文がくるので、もはや場所は関係なくなったの思いも持つ。

### 若手起業家の仲間にも恵まれ

松江に暮らし始めて2年余り。いい街との印象をもつ。「いいものを作っているとダイレクトに噂が伝わります。

輪買って帰れるような店がいい」と独立を決意し、妻の実家のある松江へ一昨年2月に1ターンの土地勘がなかったため、あえてじっくりと出店先を探しながら仕事をしようと、トラックの荷台に木造の小屋を積み、そこに花を置いて売り歩くことからスタートした。移動販売では、広場や駐車場、店先などの場所を借りて店を開く。基本的に屋外だからオープンで、気軽に寄ってもらえる。丸ごと見てもらえるので自分たちの売りたい花の雰囲気も伝えられる。そうして次第に自分たちが提供する花々のファンも増えてきた。昨年の9月、念願の店をオープンすることができた。

### シックな彩りと可憐な姿でランパルフェの世界を

店内には数多くの花々やリースなどのオブジェ、小物が所狭しと並んでいるが、どれもシックでアンティークな雰囲気統一される。鮮やかな色を競うようにカラフルな花々が並ぶ一般的な花屋のイメージは、ここにはない。吉田さんはこうした色合いをシャビースタイルと呼ぶ。シャビースタイルとは錆びたという意味で、どこか懐かしくノスタルジックな装い。控えめながらも気品を感じさせる色合いだ。今どきのインスタ映えにびつたり、絵になる花々である。

「これが僕たちの好きな花の色です。」  
東京だとはいけません。人口20万人ながら非常にコンパクトな街だと思います。1ターンの前に定住イベントで知り合った同世代の若手起業家もいて、いろいろな相談のつてくれたり、お互い刺激になったりという。仕事と私生活のバランスの良さ、ていねいな仕事をするための時間のゆとりもあり、今の暮らしについて「いいリズムでできています」と満足そう。

店名の「ランパルフェ」はフランス語で「未完了」を意味する言葉に由来する。名前を付けたときには、まだ店がなかったことがその理由だ。  
「それはまた、終わることのない探究心であり、何かをずっと求め続けていく姿勢でもあるかもしれません」と吉田さんは付け加える。今でも週末や、依頼があったときは、トラックの小屋に好きな花をつんで移動販売(マルシェ)に出かけ、未だ見ぬ人との新しい出会いの場をつくる。旅する花屋の冒険は、まだまだ終わらないようだ。



■Lamparfe (ランパルフェ)  
〒690-0002 島根県松江市大正町434-15  
TEL0852-25-8522  
【営業時間】11:00~18:00  
【定休日】水曜日・不定休あり  
【Facebook】https://www.facebook.com/lamparfe/